



越中おわら節の歌い方を創り上げた名人

えじり とよじ 江尻 豊治 (1890~1958)

江尻豊治は明治23年（1890）9月28日、八尾町東町で父 江尻半兵衛、母 みつの三男として生まれた。半兵衛は八尾でも知られた浄瑠璃の語り手であり、明治の初めに古い越中おわら節の原型をまとめたと言われる。また、叔父の与三吉は三味線の名手、その妻せき子は踊り達人であった。

豊治は尋常高等小学校を卒業後、八尾町西町の鍛冶屋に見習い奉公した。明治44年（1911）、豊治は進行性色弱による失明の恐れがあったため大阪へ出て鍼灸術を習うことになった。その修行中、芸能好きが高じ、大正4年（1915）から6年までの2年間、文楽の竹本南部太夫に弟子入りして義太夫を習った。そのとき師匠から「節回して文句を生かさにならんぞ」と言われたことが豊治の歌い方の基本になった。そして、大正4年には京都の東洋蓄音機株式会社（オリエントレコード）にて「越中おわら節」のレコード吹き込み第1号として参加している。それが、豊治が持ち前のきれいな高音で喉を振るわせ、「越中おわら節」の魅力を全国に広めた最初であった。

大正8年（1919）、大阪から帰郷。義太夫や都々逸、小唄等に加え、三味線・胡弓・太鼓といった囃子も堪能であった豊治は、おわらの歌い方を引き続き研究し、高く繊細な調子で情感を込め、ゆっくりとしたテンポで、上の句の七七と下の句の七五をそれぞれ一息で歌いきる歌い方を創り上げた。この豊治の歌い方が今日、八尾で歌われている「正調 越中おわら節」になっている。ただし、この歌い方は高音の発声が非常に難しく、歌い手は今でも難儀しながら歌っている。

大正10年（1921）5月、東京神田の青年会館で第1回全国民謡大会が開催され、豊治も出演した。翌年の第2回大会では、豊治は出演しなかったが、越中おわら節が江差追分を抜いて日本一に輝いた。

昭和4年（1929）5月、翌月に東京三越デパートで開催される「富山物産展」に「越中おわら節」が出演するにあたり、新しい振り付けの踊りを作るために八尾に新進舞踊家の初代 若柳吉三郎が招かれた。若柳が、現在も踊られている、その新しい振り付けを考案する際、豊治は求めに応じて何度も「越中おわら節」を歌った。そして6月、東京で、若柳の新しい振り付け（踊り）、歌人の小杉放庵がつくった「ゆらぐつり橋手に手を取りてわたる井田川 おわら春の風」の新しい歌詞が、豊治の歌にのせて披露され、ここに現在まで引き継がれる「越中おわら節」のスタイルが創り上げられた。その後も新しい歌詞を積極的に取り入れながら「越中おわら節」は進化を続けていった。

昭和22年（1947）、豊治は、昭和天皇の富山巡幸の時に、県庁前広場で天皇の前で「越中おわら節」を歌い上げた。また、昭和27年（1952）・28年の全国民謡舞踊大会では2年続けて優勝に導いている。

昭和33年（1958）6月16日死去。時には表に立ち、時には裏方へ回り「越中おわら節」の確立と発展に力を注いだ生涯であった。享年68歳。

＜専門員 松井 功一＞



浄瑠璃修行（大阪）時代の豊治



レコーディング風景（左から二人目が豊治）